

議事録

年 月 日	令和6年7月5日（金）
時 刻	午後3時30分～午後5時25分
場 所	伊那市生涯学習センターいなっせ 6階 ニシザワいなっせホール
内 容	令和6年度 第2回 伊那市新産業技術推進協議会
出 席 者	委 員 会場出席 26人、オンライン出席 3人、欠席 5人 アドバイザー 会場出席 3人、欠席 3人 事務局 企画部 飯島智 部長、企画政策課 織井邦明 課長、 地域創造課 田中久 課長、情報政策推進課 宮島剛史 課長 市民生活部 柴公人 部長、生活環境課 金子勝勇 課長、 保健福祉部 村松義隆 部長、社会福祉課 城倉哲哉 課長、 子育て支援課 宮下威暁 課長、商工振興課 柴正人 課長 都市整備課 原洋介 課長 （課長以上記載）
内 容	1 開会（織井企画政策課長） 2 委嘱 3 正副会長互選 会 長 … 栗林秀吉委員（伊那市政策委員、伊那市産業振興委員） 副会長 … 不破泰委員（信州大学理事・副学長） を選出 4 正副会長挨拶 （1）会長挨拶（栗林秀吉会長） ・平成28年に設置した本協議会は今年度で9年目を迎えた。今まで産業、福祉、教育、行政、環境と幅広く活動し大きく発展してきた。 ・本協議会の各活動は概ね良好に進展しており、市民より高い評価をいただき、全国的にも注目されている。さまざまな困難を乗り越え、協議会活動をここまで育てていただいた委員・アドバイザーの皆様に感謝申し上げる。 ・地域にあるさまざまな分野の課題について本協議会で取り組み、課題解決につなげてきた。また、解決に至っていないものも課題解決に向かって進んでいる。これは、KPI の設定、PDCA サイクルが機能しているためであると考えている。 ・伊那市は日本を支えるモデル都市の構築を目指している。第5期協議会は、進化フェーズに入り、レジリエントまちづくり部会を立ち上げる。委員の皆様のお力添えを受け、協議会活動を前進させるべくベストを尽くしていきたい。 （2）副会長挨拶（不破泰副会長） ・地域課題の解決、地域の発展のためには、地域を一番理解している地域に住む人が状況判断して戦略的に解決策を考え、地域外の人が協力・アドバイスする関係性が重要であると考えて

いる。

- ・本協議会は、その関係性を築き上げ、実績を積み重ねている稀な協議会であると思う。
- ・副会長として、栗林会長を支えながら貢献していきたい。

5 会議事項

(1) 令和6年度各部会計画について

(事務局より説明)

<委員>

- ・サステナブル環境部会の中で、木質バイオマス発電等で流木を使う取組みがある。流木を使うのは技術的にもハードルが高いが、非常に楽しみにしている。実現できた暁には、発電された電気を地域内で地産地消できるようにお役に立ちたい。

<委員>

- ・保健福祉事業の対象者はさまざまで、サポートや手段も多種多様である。コネクテッド保健福祉の取組みでは、体の問題、心の問題にも優しく寄り添っており、本協議会の一つひとつの施策が線から面になってきていると感じた。

<委員>

- ・伊那市は地震にも噴火にも強い安全な地域だと認識しているが、レジリエントまちづくり部会の取組みには、防災の視点が希薄であると感じた。防災という視点も加えて考えてはどうか。

<委員>

- ・日本の国土の67%は山間地であり、無人VTOL機による物資輸送プラットフォーム構築事業はそこにキャッシュフローを見出している最先端の取組みである。見守りや災害対応についてもキャッシュフローになるような仕組みを作っていただきたい。

<委員>

- ・モバイル市役所導入によって、職員の業務量は減っているか。
→職員の業務量の算出まではできていない。(事務局)

(2) レジリエントまちづくり部会について

(事務局より説明)

- ・高校再編等により、伊那市駅、伊那北駅周辺の動線等、中心市街地を取り巻く環境の変化が予想されている。この機会を新しいまちづくりのきっかけと捉え、市民、議会、商工団体等各種団体と連携を図り、中心市街地エリアの価値を高め、その取組みを市内全域に広げていきたい。
- ・取組みの中では、新産業技術も取り入れた新たなまちづくりを推進していく。賑わいがあり快適な暮らしが実現できる、誰もが住み続けたいと思えるまちの実現に向け、産学官民連携していきたい。
- ・委員・アドバイザーの皆さんの知見をいただきながら進めていきたい。

(レジリエントまちづくり部会委員を代表して鳥山香織委員(信州大学)から挨拶)

- ・伊那市にとっての「レジリエント」とは何かということから皆さんと議論していきたい。
- ・他の部会での実証とつなげることがこの部会には必要になると思うので、面的な取組みになるよう心掛けたい。

- ・さきほど防災の視点を加えてはどうかという意見をいただいた。いかに防災という非日常と日常をつなげていくかといった視点も持ちながら、進めていきたい。

6 白鳥市長挨拶

- ・「地方創生」は、地域で自活し自立できることが一番大事だと理解して進めている。
- ・しかし、「地方創生」が形になっていないのが課題である。この地域では自分たちが食べるものは自分たちの力で生産する、森林から湧き出る水を還元し、飲料水、農業用水、工業用水に使う、海外の化石燃料に頼るのではなく、小水力、森林資源を使った木質バイオマス、ペレット、薪で地域のエネルギーを回す、ということをやってきた。
- ・そんな中、大多数の地域人材が都会へ出て行ってしまう。この問題をどう解決するか、地方が抱える大変大きな課題である。
- ・本協議会は、第5期からレジリエントまちづくり部会を設置した。
- ・伊那北高校と伊那弥生ヶ丘高校の統合による新しい高校（以下「伊那新校」）は令和10年度開校予定であり、もう間もなくの話である。これにまちづくりを絡めていきたい。伊那新校の校地が現在の伊那北高校になることにより、伊那市駅が寂れるのではないかと心配もあるが、伊那弥生ヶ丘高校の将来活用方法がポイントであり夢がある。
- ・伊那新校、上伊那総合技術新校、信州大学農学部、南信工科短期大学校、inadani-seesを含む大きな文教地域ができる。これもまちづくりに活かしていく。
- ・単にハード面で新しいものを作るのではなく、今あるものを使って新しい息吹を吹き込んでいきたい。大きなお金を掛けるのではなく、ソフト面でまちづくりをしていこうという取り組みである。
- ・この地域の課題を解決して地域が活性化する、それが全国に横展開できるよう、皆さんのお力添えをいただきたい。

5 会議事項

（3）協議会第5期の展望について（事務局より説明）

<委員>

- ・初めて参加したが、この協議会で様々な取組みをされていると実感した。当社は、医療 MaaS、行政 MaaS に強みがある。今後も我々の強みを活かしてどんな支援ができるか考えていくので、引き続きお願いしたい。

<委員>

- ・この協議会は、先進的なプロジェクトに取り組み、様々なところで評価されており、一伊那市民として嬉しく思っている。外向けだけでなく、市民に対しても様々な場面で内向けの広報をしてもらえれば、そこからまた人づてに広まり、移住定住にもつながるのではないかと。→外向けにはいろいろなツールを使ってプロモーションをしてきた。おかげさまで、全国からの注目度は高まっている。市民向けにもしっかりと広報しなければならないとの認識は持っている。伊那ケーブルテレビジョン(株)に、ゆうあいマーケット、ぐるっとタクシー、モバイルクリニックについてユーザー目線のプロモーション動画を作成してもらい、現在ケーブルテレビのニュース番組の合間に放送してもらっている。（事務局）

<委員>

- ・当社で伊那市のドローン物流構築のお手伝いをした。その後、当社では全国39の自治体でド

ローンの物流について実証等を行っている。これは、「伊那市から変えていく」を具現化したものである。今後、ドローンのマルチユース化にも貢献できるよう提案していきたい。

<委員>

- ・協議会発足当時、「新産業技術」という言葉を聞いたとき「冷たい」、「付いていけない」、「自分には関係ない」というイメージを持たれるのではないかと懸念を持っていた。今回の協議会を通じて、この協議会の取組みが、弱い立場の人に寄り添い、希望の光になっていると感じ、ジーンとくるものがあった。この協議会は、「新産業技術」という言葉からイメージできないプロジェクトになっていると感じる。

<委員>

- ・今日のこの協議会の前に、プロモーションについて市の広報担当者に話を聞いたが、「市民の理解を高めるのが非常に重要」だと言っていた。
- ・この協議会の活動は中学生や高校生が一番恩恵を受けるものである。もっと若い人をこういった場に連れて来て、「自分たちの将来をどうしたいか」というワークショップ等をするなど、若い人を巻き込むような活動ができればよいと思う。それによって中学生や高校生の家族にも伊那市の活動が伝わるのではないか。
- ・今後、人口減少、少子高齢化は加速していく。円安で輸入物価が上がることによるインフレ、人材不足という課題に伊那市がどうアプローチするかが日本の希望につながる。
- ・メタバースが普及し、時間と場所の概念が変わる中で、今後伊那市の人口は増えない。
- ・伊那市は災害に強いと言っているが、今後地球温暖化で世界の平均気温が2度は上がる。こういった問題を現実的に捉えて、場合によっては、居住区と非居住区を線引きして居住区を縮小する等、いろいろな現実を踏まえて希望のある取組みをしていくと伊那市がさらにレベルアップしていくと思う。

<委員>

- ・他の自治体でもこういった取組みを行ってはいるが、伊那市は大枠が見えても、そこから組み合わせを変えたりして、さらに新しいチャレンジをしていくところが強みだと思う。今後もチャレンジを継続して、他の自治体の希望となってほしい。

<委員>

- ・白鳥市長や事務局の話を聞き、これから進化のフェーズがどうなっていくかを考えていた。これからは、全国展開していくフェーズであり、伊那市のこの取組みを市民のために「価値」にできないかと考えた。施策をパッケージごと他の自治体に使ってもらい、利益が出たら市民に還元するようなフェーズが来るのではないかと考えている。

→全国展開に向けての一步として、デジタルタクシー事業については、市が開発した精算管理システム、クラウドサービス「DTaM」(Digital Taxi Management)を著作権放棄せずにパテント料を収入としている。これをきっかけに、本協議会の取組みを「伊那市モデルの地域課題解決のパッケージ」として売っていけるようやっていきたい。(事務局)

(全体を通してアドバイザーから一言)

<アドバイザー>

- ・飯田国道事務所では、公共施設の整備・維持管理を行っているが、公共施設の老朽化が進んでいる。点検については、効率化が進んでおり、この協議会でもドローンによる橋梁点検構築事業を行っている。ただ、実際に触らないとわからないこともある。先進技術とアナログをどう

使い分けていくか、まだしばらくは課題になると思う。

<アドバイザー>

- ・これから向かっていく姿を大きなコンセプトで捉えつつ、部会ごとに細かい KPI を設定し、地に足の着いた取組みを進めているところがこの協議会の素晴らしいところである。
- ・政府は先月末、「デジタル社会の実現に向けた重点計画」を閣議決定した。日本のデジタル社会のあるべき姿の羅針盤ともいうべきものであるが、この協議会は、国の目指す姿と同じような姿を目指していると感じた。非常に素晴らしい取り組みだと思う。
- ・伊那市から日本を変える皆さんの先進的な取組みを日本全国に広げるお手伝いをさせていただきたい。また、参画する企業や伊那市にもメリットがあるパテント事業の展開でもお手伝いできればと思う。

<アドバイザー>

- ・協議会の取組みが着実に進んでいるということで楽しみにしている。県でも DX 推進課を設置したので、伊那市の取組みを参考にさせていただきたい。
- ・レジリエントまちづくり部会については、高校再編、リニア中央新幹線と今までも県と伊那市が連携してきた取組みと関係が深い。引き続き連携していきたい。

<白鳥市長総括コメント>

- ・嬉しいコメントをたくさんいただいた。さらに進化していかなければならないと感じている。
- ・この協議会の活動を通し、行政だからできるとかできないではなくて、地域の中の一人として考えてやり抜くということをしてきた。それが市の職員の自信になっている。
- ・若い世代の話が出たが、地域の子どもたちと一緒に考えて、「これからの時代」を作っていくということをやっていききたい。
- ・新しいまちづくりも、中学生、高校生、大学生に参加してもらうよう進めている。
- ・公務員は失敗を恐れて挑戦しないが、失敗してもいいからトライをして、失敗したら原因を分析して解決して、またトライすることの繰り返しを公務員はもっとやっていくべき。
- ・伊那市は、快活で、二つのアルプスに囲まれ、広い平野があり、災害が少ない地域であり、ご先祖様はよくぞこの地域に住み着いてくれたと思う。この素晴らしさに満足するのではなく、この素晴らしさを活用した新しい気付きを全国に発信しなければならないと考えている。
- ・この地域から日本を変えていこうという気持ちが強い。今後ともお力添えをお願いしたい。

7 閉会（織井企画政策課長）